

# 援けます! 実力派抗がんサプリ

## 仏教医学の宝

### 『紅雪冬夏』で腫瘍消失続々!

旭丘光志 医療ジャーナリスト

どちらを選択するにしてもその目的を確実にするには、統合医療的な視点から身体本来の「健康復元機能」の土台強化が不可欠です。

「免疫機能、ホルモン分泌機能、細胞のエネルギー産生機能、自律神経調節機能、消化吸収・代謝機能、血液循環」といった身体の健全性復元機能こそ、がんと身体の闘ぎあいの最前線なのです。がん細胞は転移増殖するとき、がん毒素ともいえる悪液物質「トキソホルモン」などを放出することによって身体の健康復元力を削ぎ、その隙隙を縫って体を侵食していくのです。

がんを発症しても体へのダメージの少ない統合医療的な手立てで治療し再発・転移を可能な限り抑えながら、時にはがんとその共存も視野に入れて、自分らしい人生をできるだけ永く生き抜きたい——がん治療の目的をそこに定める人たちが少しずつ増えてきています。

しかしがん医療の大勢は、今も「体内のがん細胞を殺し尽くそう」ということになっていきます。より過激な抗がん剤治療や臓器摘出手術や先進的放射線療法により多少のダメージは覚悟の上で体内からがん細胞を駆逐しよう、というがん治療がいつの時代も医師や患者さんを惹きつけるのです。

悪液物質の毒性を無害化し身体に備わる健康復元機能を強化する物質を、地球上の自然は予め用意してくれています。おかげで人類は医師などいなくつた原始時代から、なんとか生き抜いてきました。私たちはその子孫です。そして今私たちは、一方方向性に鋭い薬効の化学薬品とは一味違う自然の抗がんサプリメントを使用経験と効果分析により治療目的別に分類し、さらに濃縮したり組み合わせたりして、より効果的に活用することができるようになってきています。

『がん』に立ち向かおうというときに頼りになる『抗がんサプリ』機能性食品は多数明らかになっており、多くのがん患者さんのがん闘病を援け支えています。確かながん治療サポート力が証明されている抗がんサプリを、これから毎月ひとつに絞り込んで真実の改善事例とともに紹介していきます。

#### ▼チベット仏教医学3大生薬の抗がん力恐るべし!

—がんの夫に『紅雪冬夏』を飲ませてあげたいのですが、送ってもらえないでしょうか?

宮城県・石巻市『ヤマト漢方薬局』の福谷信治薬剤師(54歳)に沖縄の女性からその電話が入ったのは、東日本大震災のちょうど1年前、平成22年3月上旬のことでした。

「夫の裁洋康さん(当時64歳・仮名)が前年末、顔の右側半分は違和感を覚え右目の周りの痺れや頭重もあつたため病院で検査を受けたところ、2cm大の「脳腫瘍」が発見されたということでした。しかし腫瘍の場所が悪くて手術できず、しかも入院後の検査でさらに「悪性リンパ腫」が発見されます。間もなく「前立腺がん」まで見つかったというのです。

脳腫瘍と前立腺がんに対しては放射線治療を受けていましたが顕著な改善が見られず、裁さんの奥さんはどうしても『紅雪冬夏』(総輸入元…双寶(株))を飲ませてみたいと言います。脳腫瘍は入院してからも大きくなっていったと言いますから、不安で居ても立ってもいられなかつたのでしよう。

「実は裁さんの親戚が石巻市におられました、その方が何年も前に前立腺がんに罹つたとき、私のところでお出した漢方薬と『紅雪冬夏』で消失したのです。しかも未だに再発しないことを、裁さんはその方からお聞きになつ

ておられたのです」

福谷薬剤師は漢方薬使用の名人として知られていますが、早い時期から自然生薬と類縁関係にある中国やチベットの民族医学系サプリメント(機能性食品)も巧みに組み合わせ独自性の高い治療成果をあげていました。常々使いこなす機能性食品は40種類にも及んでいたのです。

その中でも『紅雪冬夏』はチベット仏教医学の三大至宝と言われる『紅景天』『冬虫夏草』『雪蓮花』を中心としてさらに漢方系の田七と枸杞子を配合した稀に見る贅沢なサプリメントでした。

沖縄の裁さんはすでに退院して通院治療になっていましたが、医師の管理下で一応正規の医療を受けていることを確認した上で、福谷薬剤師は『紅雪冬夏』を飲んでもらうことにしました。福谷薬剤師の記録とお話から改善経過を見ていきましょう。

3月15日服用開始—1回4粒×1日3回。裁さんにはがんのほかにも以前から、高血圧、狭心症、前立腺肥大(ときに失禁もあり)という生活習慣病的既往症があり、そちらの改善も『紅雪冬夏』で同時に可能と考えた結果でした。

福谷薬剤師のがんと向き合い方はがん細胞だけをターゲットにするものではありません。統合された生命体として体自体の自己修復能力の強化と連動させることによって、がんを克服しようというもののなのです。沖縄と石巻



漢方薬とサプリメントの組み合わせに精通する石巻市『ヤマト漢方薬局』福谷信治薬剤師

市は遠い地ですが、電話で裁さんの状態を確認し微調整しながら紅雪冬夏による治療は進められました。

3月31日―顔色がピンク色になり血色よく、裁さん本人も体感すこぶる善しと連絡あり。

4月、5月―体調良好との報告つづく。

6月―肌の弾力が出てきて知り合いにも病人には見えないと言われるようになる。裁さんは紅雪冬夏の効果ではないかと実感を語る。

7月―顔の違和感と右目周りの痺れが消失。同時に頭の重苦しい症状が気にならなくなる。

8月―病院で脳のPET検査を受けるが、どこにも脳の腫瘍が見つからず。脳腫瘍が消失したのか？ 前立腺がんの影も消えていた。医師も驚き首をひねっていたという。悪性リンパ腫については何も語らず、福谷薬剤師にも不明のまま。いずれにしてもまだ治療途上と考えて、以後も紅雪冬夏は同じ量を継続服用する。

平成23年3月11日「東日本大震災」

発生―石巻市も壊滅的被害を受け、福谷信治薬剤師の店もめっちゃめちゃになるが幸い家族は全員無事だったことを、旭丘は電話で確認。その状況でも継続服用のお客さんには、裁さんも含め切れ目がないよう製品を送り届けているという。人の健康を支える責任の重さが言葉の端々から伝わってくる。

平成23年7月―前年8月以降MRI検査で3カ月に1回脳腫瘍と前立腺がんの動向を追跡するが、画像上の異常はまったくなし。前立腺がんの血液検査PSAも低値で安定。紅雪冬夏の服用は同じ量を維持。不思議なことに悪性リンパ腫もいつの間にか問題なしになる。

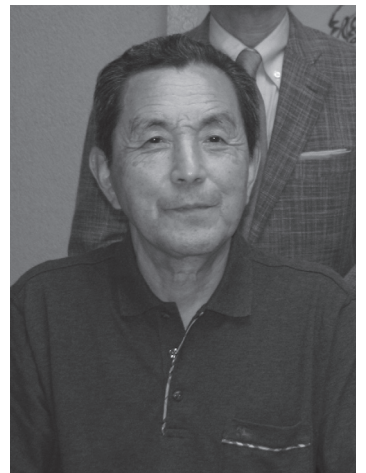
平成24年6月―画像検査も血液検査も異常なし。担当医から「もう大丈夫」とお墨付きをいただくが、裁さんは再発防止のために紅雪冬夏の継続服用を希望。4粒×1日2回に量を減らしてつづける。

そしてさらに1年後の平成25年5月―福谷薬剤師にとっては忘れられないことが起こります。裁洋康さんが奥さんをはじめ家族大勢で、親戚の震災見舞いを兼ねて元気になった姿を見せに石巻市の『ヤマト漢方薬局』にやってくる。福谷薬剤師は声を弾ませて語ります。

「がっちりした体格の方でね、紅雪冬夏に出会えて本当に感謝しています、と直接お礼を言われて、この仕事をさせていただきよかったです。がんの

ほうはどれも、もう心配ないと医師から大鼓判を押されたそうです。再発予防に続けたいという紅雪冬夏を、1回3粒×2回に減らしました。一方で高血圧と狭心症への心配がまだあるとのことでしたので、問診と舌診を行い漢方の補腎薬を調合しました。生活習慣病は個人の体質や生活習慣に合わせて微妙な調整が必要なのですが、お会いするとそれが可能になります」

平成26年9月上旬の取材時も裁さんはがん再発の心配もなく、ごくわずかな紅雪冬夏と補腎薬を友として異常気象にも負けず沖繩の夏を楽しんでのことでした。



市浜市には見えない85歳の漢方師 谷勝己さん

ことよって、ミトコンドリアのエネルギー産生を助け細胞レベルから生命活動を賦活するので。酸素こそ生命維持の根元であり、また酸素不足は細胞のがん化を招き寄せるとも言われます。

米国・フロリダ統合医療大学のダニエル・C・クラーク医学博士は「がん発生の根本原因は細胞の酸欠」と断定し、ドイツで行われた実験で、「細胞のなかでエネルギー産生を担っているミトコンドリアの酸素量が35%を下回ると細胞のがん化が起こる」ことが明らかになっていると言います。酸欠でミトコンドリアがダメージを受け、それが遺伝子の損傷につながって、細胞のがん化が起こるのだと。

『冬虫夏草』は仙人の食べ物という伝説に包まれ昔から不老長寿の切り札とされてきました。本物はチベットの3500メートル超の高地で、1年のうち初夏の半月ほどしか採集できません。生息する蝙蝠蛾の土中の幼虫にバツカク菌科冬虫夏草菌が寄生し、その幼虫を菌化して生え、虫であり植物でもある」という不思議なキノコです。

中国では最高級の薬膳としても食べられます。全身の健康復元作用に優れた生活習慣病を遠ざけ、また現代医学で治療法のない難病の症状改善とがんになったときの延命効果も期待できると言われます。体のあちこちに散ってしまっただけで手につけられなくなったがんへ



あさおか・こうじ

1938年、樺太・豊原市（サハリン・ユジノサハリンスク）生まれ。作家、ジャーナリスト。小説およびノンフィクション（人物論、社会問題、教育分野、医療分野）で活躍。医療分野では、1980年代から、統合医療へと向かう世界的な新しい医療潮流を追って、各国の医療現場を取材執筆。著書に『統合医療の力』、『決定版 シベリア健康法』、『食べて治す機能性食品』ほか多数。

の、奇襲作戦の効果もあるようです。  
『青海冬夏草』という冬虫夏草のエキス剤もあり、現代医学に見放されたがん患者さんが最後に頼るケースも珍しくありません。その味は最後の項で紹介します。

創業450年を超える大阪府・堺市『片桐棲龍堂薬局』の片桐平智薬剤師は「冬虫夏草は長生きして充実した生命を亡くなる寸前まで完全に使いいきり、苦しまずストンと死ぬるようになる特別な存在」と言いきります。まるで悟りの境地に誘うようで、まさに仏教医学に似つかわしい働きと言えます。

『雪蓮花』はホルモン系の調整を担います。脳内ホルモンに関わる問題や更年期など女性の疾患に力を発揮し、がんでは乳がんや子宮がんなどの医学的治療を、内分泌系の調整によって支えます。

高知市在住の藤山和美さん（68歳…仮名）は自身のアンチエイジングのために以前から1日1粒の紅雪冬夏を欠かしませんが、最近では長年のリウマチで苦しむ妹さんにも毎月送っていると言います。リウマチは女性に多くなかなかりにくいのですが「紅雪冬夏を飲み始めてから全身的に元気が出てきた、と妹は喜んでいます」と話してくれました。

男性ホルモンが関わる前立腺がんでも調整作用を発揮し、病院の治療を底支えすると言われます。

これらの薬効素材はいずれも標高3000〜4500メートルといった青

海チベット高地に自生するもので成長も遅く、人工栽培には適しません。そのため無制限に採集すると枯渇する怖れがあるとして、最近チベット自治政府の採集制限が厳しくなっています。また低酸素の高山で生きるチベットの遊牧民にとつて、紅景天は高山病対策の必需品でもあります。必然的に非常に高価になっています。地球からの貴重な贈りものとして、私たちは感謝をしながら使わせていただかなければなりません。

### ▼前立腺がん+胃がん+舌がんを『冬虫夏草』だけで克服した人

長年医療分野の取材をしていると、信じられないような事実遭遇するところがあります。

「前立腺がん」「胃がん」「舌がん」を次々に発症しながら病院の治療をことごとく拒否し（状態確認のため大学病院で定期的な検査だけは受ける）、冬虫夏草単独のサプリ『青海冬夏草』だけですべてを克服した横浜在住の染谷勝己さん（85歳）を紹介しましょう。本名です。

最初に発症したのは『前立腺がん』でした。16年前の平成10年2月、東京で学習雑誌の出版社を経営していた染谷さんはJ医大病院で「前立腺切除手術と化学療法併用治療」を勧められましたが、どちらも拒否し「待機療法」を希望します。34歳のとき胃がんと手術を受けた父親が、その日のうちに出血

多量で急逝したことが頭を離れなかつたのです。

待機療法というのは何もしないで様子を見るということですが（高齢者の前立腺がんは進行が遅いため珍しくない）、進行状態から見てもそれは危険として病院側に却下されます。ほかの4病院にも相談しますが皆同じ返事で、染谷さんは会社を閉じ「治療なし、検査だけ」の生活に入ります。不思議に進行は止まったままでした。心配した知人がいろいろな機能性食品などをくれますが、一切飲みませんでした。

7年後の平成17年9月、舌にシコリを感じJ医大耳鼻咽喉科で検査を受けると「内部進行型舌がん（転移ではなく原発性）」と診断されました。医師は熱心に手術を勧めますが、染谷さんはやはり拒否。その頃染谷さんは心配した昔の教え子（元教師でした）から、冬虫夏草エキス『青海冬夏草』をいただきます。

「2種類ものがんを抱え込んでさすがに不安に駆られまして、今度はすぐに飲みました。すると1ヵ月後の検査で舌がんの腫瘍マーカーが劇的に下がったのです！ 驚いて以後希望に燃えて真面目に飲むようになりました」

ところが年が明けた平成18年1月になつて、原発性の「胃粘膜内がん」が見つかります。3種類の原発性がんを抱えたワケです。やっぱりダメだったかー冬虫夏草に希望を託していただけたに、気丈な染谷さんも落ち込みました。が、とにかく飲みつけました。

そして1ヵ月後の2月の画像検査で、染谷さんはまたまた度肝を抜かれることになるのです。

「ずっと抱え込んできた前立腺がんも新しい胃粘膜内がんも、ともに消失していたのです！ 医師がいくら探しても見つからなくて、しばらくしてやつと消失が確認されました」

チベット仏教医学の生薬素材はやはり、ただならぬ健全性復元の力を秘めていたのです。誰もが同じ結果を得られるとは限りませんが。

その翌年の平成19年に私は染谷さんとはじめてお会いし、発病以来の経緯を詳しく取材させていただきました。そのとき前立腺がんも胃がんも消失したままでしたが、舌がんは依然としてありました。しかし苦痛はなく悪さをするわけではないから、と治療は一切受けておられませんでした。

あれから7年—この記事のために染谷さんのその後の様子を伺いました。「冬虫夏草のエキスは今もう飲んでいないのですが、舌がんは消えはしません。がまったく変化なしです。前立腺がんも胃がんは再発の心配もありません。でも抗がん剤などとは違う冬虫夏草のよさは十分に経験していますから、がんが動き出したら抗がん剤ではなくまたこつちを飲むことになるでしょう」

染谷さんは85歳とは思えないほどお元気な声で、今も自炊し毎晩1合の晩酌を欠かさないと楽しそうに話してくれました。